



# コンテンツ制作のIPとクラウド化



## テッド若山

米国放送業界アナリスト NSIリサーチ代表

米国の調査会社ストラテジック社の調査担当副社長を経て、1987年にNSI Research社を設立。情報・通信・放送技術分野のマーケット調査、コンサルティング・サービス、マンスリーレポートの「The Compass」を提供している。連絡はTedW@nsirinc.comまで。

NAB Showはパンデミックにより2019年～2021年までリアルな展示会を開催することができなかったが、パンデミックはコンテンツ制作のIP化とクラウド化を加速させた。この動きを、650人以上の放送とメディア事業者に対するアンケート調査を毎年行っている放送向けIPソリューション会社のHaivisionの調査結果を使って説明する。

Haivisionは毎年3月ごろに調査結果を発表しているので、2020年の報告はパンデミック直前のものとなる。「最大の課題は何か」の質問に対する2020年の回答トップ3は、1位がIPへの移行、2位が遅延の減少、3位がクラウド技術の導入であった。2022年ではトップ2が入れ替わり、1位が遅延の減少、2位がIPへの移行となり、3位には2020年では4位であった予算の制限が浮上し、クラウド化は7位に落ちている。

どちらの調査結果でも、IPへの移行は重要な課題であるが、状況には大きな変化がある。放送局のABCがIPへの移行計画を発表したのは2015年である。2020年初めでは一部の先駆者が大きな進歩を遂げていたが、多くはまだ検討段階であった。2020年の「どのIP技術を使っているのか」の質問に対して、40%が「使っていない」と答えてトップであった。2年後の調査では、「NDI」が45%でトップとなり、「使っていない」は19%に減っている。しかし、すでにフルにIP化していると答えたのはまだ17%で、SDIのみ

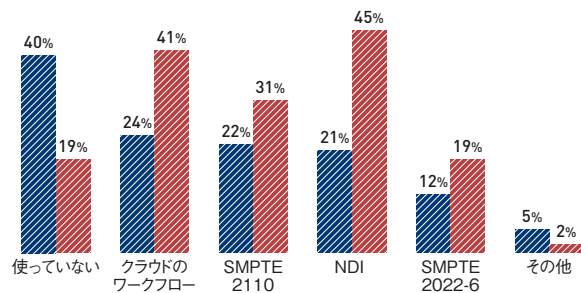
が35%、両方が48%で、半数がまだ移行中であった。

IP化が依然として大きな課題であるのに対して、クラウド化が7位に落ちたのは、重要性が低くなったからではなく、パンデミックにより導入が大きく進んだからである。2020年時点の調査では、クラウド化はまだ行われておらず、「ワークフローのおよそ何%がクラウド化されているか」に対する回答のトップは「0%」であった。しかし、パンデミックによりリモート制作を余儀なくされ、クラウド化は加速した。2022年の調査で、クラウドをまだ使っていないと答えたのは16%で、23%はワークフローの50%以上をクラウド化していると答えている。リモート化されているワークフローとしては、トップがライブ制作(65%)、2位が編集(48%)、3位がグラフィックス(43%)となっている。

パンデミックによってクラウドを使ったリモート制作は進んだが、収束後は元に戻るのであろうか。「パンデミック後の組織がどうなるか」の質問に対して、60%は新たなリモートとオンプレミスのハイブリッド型に移行、23%はさらに分散化を進めると答え、オンプレに戻ると答えたのは15%である。だが、リモート化をさらに進めるにあたって遅延が大きな問題となっており、2022年の調査では課題のトップになっている。



### 採用しているIPネットワーク技術は？



### リモート化されているワークフローは？ (2022年の回答)

